

# 伊勢物語の独詠歌とあいさつ性

上野辰義

一、はじめに

二、あいさつと和歌

三、伊勢物語の独詠歌

四、伊勢物語の人間連帯

人間相互の良好な関係の構築・維持・確認を目的として交わされるあいさつは、コミュニケーションの一部として文学作品の中にも描かれている。だが、その様相はいまだ独自に分析されてはいない。本稿では伊勢物語の独詠歌をとりあげて和歌のあいさつ性について考えてみる。そこには、人生の折目に際しての認識を自己・世間一般に表出する要素と、人間連帯への信頼と誠実さ、自己主張を含めた和歌的主情性が認められる。

あいさつという行動が人間以外の動物にも見出されることが知られ、あいさつのもつ個体間の緊張緩和・関係の調節という機能が、現在のように注目されるようになる以前、戦後の混乱もようやく落ち着いてきたころ、NHK京都放送局のプロデューサーであった田代晃二氏は、『言葉の使い方』（昭和二十六年五月、創元社）という本を著されて、文字どおりさまざまな対人的な場における言葉の使い方について述べられた。その中で、氏は、「あいさつ」という節の冒頭で、あいさつについて、

人の交際はいいさつに始まり、あいさつに終る。と切りだして、以下、次のように続けられている。

知人間の出会いのあいさつは、変りなき心情を示し合い、互の無事は喜び合い、悲しみはいたわり合い、今後も交際のつづかんことを願つて、互の無事を祈り合い別れるのがその本来の姿である。

未知の人へのあいさつは、行きずりとか道を聞くとかの場合、敵意なきことを示し、あるいは一時の好意を請うて、丁寧に別れるものである。業務上、あるいは社交上のあいさつは、先ず敵意なきことを相手に感知させ、更に進んでは互に好意を得んとして、誠意

を示し合い、今後の交際を望んで別れるのが本来の姿である。

これらの言辞の背後には、田代氏の周囲に新村出博士のような言語学者が存在したことの影響があるかもしれない。しかし、このような認識自体は、本書の「あとがき」に記されるごとく、両親の出身地をはじめ、日本語方言の異なる各地を転々とした生い立ち、成人してからは教養番組のプロデューサーとして、また一人の人間として、長年多くの対人的な場において種々の体験・見聞を経て来られた田代氏個人の獲得物であったと見ておいてよいだろう。

それはともかくとして、この氏の認識は、これに加えて、あいさつを言葉の面のみならず身振り・表情など非言語的な面をも含めたものととらえ、あいさつ行動の背後に氏の言われる「知人間」「未知の人」「業務上」、あるいは「社交上」などという現実の人間関係・身分関係・力関係が作用していること、その機能が個人・集団間の社会関係を調節するものであること、さらにはあいさつする者の意図によって人間関係の破壊をも含めてさまざまな効果・表現が可能であること、等を明確にしておくならば、あいさつの本性を行為者の心の側面から捉えたものとして、半世紀後のわれわれにとってもいまだに新鮮であるといわねばならない。

このような、出会い・別れ・祝い・見舞い・感謝・詫言

など、人間関係の折り目において、現実の人間関係（身分関係、力関係）に規定されて、相手に敵意のないことを示し、人間相互の良好な関係の構築・維持・確認を目的として交わされることばや身振りなどとしてのあいさつは、既に橋本四郎氏が言及されているように、日本においては『魏志倭人伝』以来その存在が確認できるもので、この列島に生きる人々とともに存在してきたものであった。そしてその具体的様相は、それ以後万葉集に見られる書簡文のように大陸文化の影響をも蒙りつつ、ひらがなによって私的な生活・個人的心情が書きとめられるようになる平安時代中期の和歌集・物語・日記といった文学作品中に、資料としても、また文学的方法としても多くの例を通して知ることができるようになる。例えば、初期の仮名作品である竹取物語には、はやく阪倉篤義氏が指摘されている、かぐや姫の求婚者たちに対する翁の詞「翁出でていはく『かたじけなく汚げなる所に年月を経てものし給ふこと、きはまりたるかしこまり』と申す」をはじめ、幾つものあいさつが認められ、私も、作品中に和歌を含めた種々のあいさつ表現が、かぐや姫の昇天の段を中心に、各段にわたりめりはりの利いた配置がなされていることを述べた。

ただ、竹取物語と同様、仮名文学成立の初期に属する伊勢物語では、散文の会話によるあいさつも見られるものの、

散文の会話も含めたコミュニケーションの手段として、竹取物語以上に和歌が重視されて、作品の核に位置しており、あいさつも主要には和歌により担われている。

それゆえ、和歌のあいさつ性について考えることは、伊勢物語の描く人間関係を見るうえで重要なのだが、これについてはいまだ十分な検討がなされているわけではない。本稿ではとりあえず、そのことを伊勢物語の独詠歌を対象に考えてみる。それはまた、今後他の作品を同視点で見えていく際の手掛かりともなるであろう。

## 二

和歌のもつあいさつ性については、時枝誠記博士が、古今集・歌合などに採られている観照的な和歌に対して、源氏物語中の登場人物の間で交わされる贈答歌を会話の言葉としてとらえ、「会話の言葉であるからには、その中に挨拶の言葉もあり、不平の言葉もあり、要求、願望、挑戦、詠嘆等、凡そ言語によって表現せられるあらゆる種類のものがあつて差支へない訳である」（『源氏物語の文章と和歌』『源氏物語講座』下巻、昭和二十四年十二月、『言語生活論』所収）と述べられたのが比較的早い時期のものである。博士はそこで、例として光源氏と中将の君・末摘花・六条御息所との間に交わされた三組の贈答歌をとりあげられてい

る。

(光源氏) 咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで  
すぎうきけさの朝顔<sup>⑥</sup>

(中將君) 朝霧の晴れまも待たぬけしきにて花に心を  
とめぬとぞ見る (夕顔)

(光源氏) 夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬにいふせさ  
添ふる宵の雨かな

(末摘花) 晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ同じ心にな  
がめせずとも (末摘花)

(六条御息所) 袖濡るる恋路とかつは知りながらおり  
たつ田子のみづからぞ憂き

(光源氏) あさみにや人はおりたつ我が方は身もそば  
つまで深き恋路を (葵)

博士はこれらを「殆ど挨拶として交換されたのであつて、  
両者に、どれだけ切実な感情があつたかは、疑はしいもの」  
すなわち「異性間に交換される挨拶の言葉」「恋愛歌の形  
式をとつた挨拶の言葉」なのだ、と言われた。

もっとも、博士がここでいわれる「挨拶」の内実につい  
ては詳しく説明されているわけではなく、「相手に対する  
周到なエチケットが、恋愛の表現とは全く別のものでは  
ると心得るだけの教養とゆとりは、平安朝人の生活理想か  
ら当然習得してゐたものと考へてよいのではないかと思ふ」

〔源氏物語の文章と和歌〕という言辞からすると、博士  
は「挨拶」を、「あひしらひ」「あしらい」の一部、すなわ  
ち相手に心遣いして本心とは齟齬する言葉で飾る応対や交  
際の術とでも言うべきものを想定されているのかと思われ  
る。このような認識には、「挨拶」という語自体のそもそ  
もの意味、俳諧で説かれる「挨拶」の意味とのつながりが  
うかがえ、現在の文学研究でもこのような「あいさつ」の  
理解の仕方も存在している。とはいへ、この「あひしらひ」  
「あしらい」「挨拶」一般も、出会い・別れ・祝い・見舞い・  
感謝・詫びなど人間関係の折り目において、良好な対人関  
係の維持・構築を意図した場合は、あいさつに該当するこ  
とになり、実際、末摘花巻の光源氏の贈歌は恋人に來訪せ  
ざる旨を告げる断りのあいさつとなつてゐるし、夕顔巻の  
例も、博士の言われる「切実な感情」の認められない「恋  
愛歌の形式をとつた挨拶の言葉」とみるなら、恋人宅を去  
るに際して見送りに出た奉公人に対する礼や労わりのあい  
さつとみることも可能である。

時枝博士によるこの指摘以後、和歌の会話性が広く注視  
されてくる中で、それに由来する「挨拶」機能についても  
近年では、古代和歌の共同性を強く説かれた鈴木日出男氏  
が、「この時代（引用者注、藤原摂関体制時）の和歌は、  
人々の実際の交際において、その社交的な性格から贈答歌

などとして挨拶・文通の役割を果たし、またその趣向性から歌合や屏風歌もおこったのである」(『古代和歌の世界』一八頁)と言及されているように、一般的な認識となっている。小町谷照彦氏が、源氏物語若紫巻にみえる北山からの帰途に際して光源氏と北山の僧都・聖が詠み交わした唱和、

(光源氏) 宮人に行きて語らむ山桜風より先に来ても  
見るべく

(僧都) 優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目  
こそ移らね

(聖) 奥山の松のとほそをまれに開けてまだ見ぬ  
花の顔を見るかな (若紫)

について、「光源氏が北山の桜を讚美して再来を約束し、僧都と聖は山の花をはるかに凌駕する光源氏の容姿の美しさを優曇華の花によそえて賞讃するという惜別の挨拶の歌となつている」(『唱和歌の表現性』『源氏物語の歌ことば表現』)といわれるのも、光源氏の詠歌の直前に「山水に心とまり侍りぬれど、内よりおぼつかながらせ給へるも、かしこければなむ。今、此の花の折り過ぐさず参り来む」と彼の詞があるように、本稿でいうあいさつと認められてのことであろう。

しかし、和歌は、あいさつ性をもつといっても、会話に

おける散文のあいさつと同質ではない。阪倉篤義氏が、歌物語の歌をもとにこの時代の和歌を論じて、唱和を含め「大部分は、この時代における和歌の一般的な傾向として、ひそかに希求し、みずからに反問し、詠嘆するもの、すなわち独話文的なもの」で、「唱和形式のものすら、いちいちの歌は独話文的詠嘆」性を示しているといわれているように(『物語の文章』『文章と表現』)、韻律を有する改まった言葉としての和歌の持つ抒情性・詠嘆性が、散文的会話におけるあいさつとは異なる質を、和歌におけるあいさつに賦与していると思われるのである。鈴木氏が『古代和歌史論』一七・七四八頁で当時の和歌について、「通達社交の具という一面と自己を表出するという一面とが、緊張的につなぎとめられる」・「一面では他者と交流しつつも、もう一面では他者と相容れない自己の心を凝視するという表現の二重性を、王朝和歌はその開扉の時点からもっていた」といわれ、また小町谷氏が前掲論文で、先の「光源氏の歌の『山桜』は紫の上を色濃く暗示したもので、「光源氏の心情の展開の文脈の中で、『山桜』は紫の上を表象する記号として機能するのである」とされるのも、この和歌の多情性と繋がっている。

このような散文的会話一般から区別される和歌のあいさつ性を観察するには、歌の詠まれる人・状況等の要素を、

説明的に示す詞書によって呈示される歌集の和歌でなく、詠歌する人物の心情が彼の内面に沿って描写され、読者による追体験の道が可能的に拓かれる日記・物語などの作品の和歌、なかならず、和歌以外の語り・発話が「おおむね、物語の中核をなす和歌に向かって推移する求心的な文体を形成して」おり、そのことが「和歌の表現を極限的に効果的ならしめている点で、他の歌物語一般とも異なる」（鈴木氏『古代和歌史論』七六六頁）といわれる伊勢物語のそれが、有効な対象の一つとして存在しているといえよう。周知のごとく伊勢物語は、後の源氏物語とも違って、登場人物の心情を彼らの言葉としては散文をほとんど用いずほぼ和歌のみによって表現させた作品であり、和歌の内包するものが他の作品に比べて格段に豊饒だからである。ここに和歌のあいさつ性の一つの極限的な姿が、伊勢物語固有の作品性と複合しながら見出されるであろうと予想されるのであり、それを知ることが同時期、また以後の和歌・仮名散文作品におけるあいさつの位相を見ていくうえでも大切であろうと思われるのである。

### 三

伊勢物語の和歌のもつあいさつ性を観察するには、コミュニケーションの構成要素である、1送り手（誰が）、2受

け手（誰に）、3送られる心的内容（何を）、4手段と通路（どのように伝え）、5効果（どうなったか）、に注目することが大事だが、伊勢物語の和歌ではこれらがすべて必ずしも明確に示されているわけではない。またこれらすべてをクロスさせることも効果的ではないので、ここではとりあえず、従来の和歌の分類におけるように詠歌する相手・受け手・享受者（久保木哲夫氏の言われる第一次享受者へ歌が詠まれた時の直接の受け手<sup>③</sup>）を基準に和歌を整理していこう。これらに基づく和歌の区別については、今井卓爾氏の説が参考になる。氏の説を整理して示せば、A-1 詠歌者が受け手を意識しない場合（詠歌者自身が受け手）|| 独詠歌、B 詠歌者が受け手を意識する場合、1-2 特定の単数の受け手を意識|| 贈答歌、1-3 特定の複数の受け手を意識|| 歌合の歌や当座の人たちの歌（いわゆる唱和）、1-4 不特定の単数の受け手を意識||（稀少のケース）、1-5 不特定の複数の受け手を意識|| 屏風歌題詠歌など、となる。5にあてられた屏風歌題詠歌では、依頼主・被祝賀者・主催者・出題者・判者など特定の人々を受け手として意識する場合もあったろうが、今は従っておく。このように分類しても、現実には、前後の詞や返歌・追和歌の有無、受け手との物理的距離・媒体（音声・文字）等の如何も関わって個々の歌の分類帰属は単純でないことが容易に想像され、

実際、A—1の詠歌者が受け手を意識しない場合（詠歌者自身が受け手）≡独詠歌においてさえも、作品中の個々の詠歌にあれば次のように調整が必要となる。

伊勢物語のいわゆる「独詠歌」をみると、詠歌が他者に到達されないという点では同じでも、（ア）詠歌者自身を受け手として想定できる場合と、

むかし、恋しさに来つつ帰れど、女に消息をだにえせ  
でよめる、

昔辺こぐ棚なし小舟いくそたび行きかへるらむ知る人をなみ

（イ）特定の他者を心中の受け手として意識する場合と、

むかし、そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを思ひける、

目には見て手には取られぬ月のうちの桂のごとき  
君にぞありける

また、結果的に通達が可能なのだが、（ウ）詠歌する場における特定の受け手の存在を意識しつつ、意識せぬ建前（振り）で詠歌する場合と、

女、男の家に行きかいま見けるを、男、ほのかに見て、

百年に一年たらぬつくも髪我を恋ふらしおもかけに見ゆ

とて、いで立つけしきを見て、（六十三段）

（エ）特定の他者に通達されることを意識して詠み捨てられる場合と、

むかし、男、女、……、いささかななることにつけて、世の中を憂しと思ひて、いでていなむと思ひて、かかる歌をなむ、よみて、ものに書きつけける。

（女）いでていなば心かるしと言ひやせむ世のありさまを人は知らねば

とよみおきて、いでていにけり。（二十一）

（オ）不特定の他者に通達されることを意識して詠み捨てられる場合と、

しりに立ちて追ひ行けど、え追ひつかで、清水のある所にふしにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつけける、

あひ思はで離れぬる人をとどめかね我が身は今ぞ消えはてぬめる（二十四段）

がある。だから、他者との通達を意図しない厳密な意味での独詠歌は（ア）の場合のみだが、詠歌する当座において他者に歌の通達されることを重視していない（あるいはその建前の）一方向的詠み捨ての歌としてこれらの場合を独詠歌に一括しておく。すると、これらにおいては一般に受け手との人間関係を意識したあいさつは存在しにくいのだ

が、実際は存在する。出奔隠遁と辞世と人の死を悼む哀傷の場合である。

現在の生活を捨てる際に詠む出奔隠遁の歌は、先の二十一段と五十九段にある。

むかし、男、京をいかが思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて、

住みわびぬ今はかぎりと山里に身を隠すべき宿求めむ  
(五十九段)

二十一段の歌は(エ)に属し、「ものに書きつけ」たもので、残された男(女とする説もある)への人間関係の転機に際してのあいさつとなる。この後、男は、行方の知れぬ女を思って、「思ふかひなき世なりけり年月をあだに契りてわれや住まひし」「人はいさ思ひやすらむ玉かづらおもかげにのみいとど見えつつ」と歌を詠んでおり、「ものに書きつけ」た「いでていなば」の歌は出奔のあいさつとして相手に通達され、機能している。しかし、残された男の詠んだ二首は、女の「いでていなば……」の歌によって引き起こされたものとはいっても、返歌とは言にくい。というの、この二首に表した自分の気持ちを去った女に知らせようとしても、その手段もないままに女には伝えられず、この二首によるコミュニケーションが二人の間に成立していないからである。男はそうなること予想しながら歌

を詠んでいる。これと同様に、女の歌も、これを見るであろう男の反応を予想し、実際残る男に出奔のあいさつとして機能したとしても、出奔する女にとってはそれを確認する必要も意志もはや存在しない、言い捨ての詠歌なのである。したがって、相手の男は通常のコミュニケーションにおける受け手のごとき送り手と対等の存在ではなく、より卑小な地位しか占めない。よって、この送り手である女と受け手である男とのコミュニケーションにおける地位のアンバランス性のゆえに、完全ではないがここに女としての独詠性が生じうる。その独詠性とは、結局、男が埋めきれない受け手の領域の残りの部分に、送り手である女自身あるいは抽象化された人間一般が入り込んでくることによってもたらされる。ここにいう受け手の領域に立ち現れてくる送り手自身あるいは抽象化された人間一般とは、例えば、森重敏氏が、言語場において話し手と聞き手との間で行われる通達を可能とするコードを含む共通言語を擬人化して、両者の内面の言語場に想定されている社会的・客観的な存在としての「内面の聴手(語手)」(『日本文化通論』第一章)のようなものに相当するであろう。今の場合、外面の言語場において受け手である男の存在が送り手である女の存在と比べて卑小であるために、その分、送り手である女の内面の言語場で「内面の聴手」の存在が顕著になっ



てくるのだと、言い換えられようか。そして、このような独詠性の存在する状況下におけるこの歌のあいさつ性とは、出てゆく自身の覚悟を男に対してと同時に女自身・世間一般に向かって宣言したところにあると言えるだろう。

五十九段の「住みわびぬ……」の歌にも二十一段と同様の状況を予想することは可能なのだが、物語本文に、詠歌の場に詠者以外の人物への言及がなく、歌のことばにも「人」など対者を想起させるものがないので、とりあえず素直に全くの独詠歌（ア）とみておくことにする。その場合は、隠遁を機とした完全にこれまでの自己に対する決別の宣言となる。

このような出奔隠遁の詠歌と同様の独詠性は、以下、詳述はしないが、辞世の歌や他人の死を悼む哀傷歌の場合にも認められる。受け手の如何で完全な独詠性を認めにくいものもあるが、詠み捨ての歌としてのありようは共通しているのである。独詠性の併存を認めうる。

例えば、辞世は、二十四段、四十段、百二十五段にある。二十四段の「あひ思はで」の歌は、先にも示したように、去る夫に追いつけず「清水のある所」の「岩におよびの血して書きつけ」ものだが、将来における受け手の登場を意識したとしても夫に限定されぬ不特定の人間であり（オ）、独詠性は強い。この場合のあいさつ性は、自身の認識を自

身・世間一般に向かって宣言した、その表出性にあるだろう。

だが、次の二例は、特定の受け手の存在または登場を意識して詠まれた（エ）と解する余地がある。

いでていなば誰か別れのかたからむありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶え入りにけり。 (四十段)

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを (百二十五段)

というのは、四十段の歌は、業平集（宮内庁書陵部蔵、私家集大成中古Ⅰによる）32（初句「いとわびて」）では、詞書に「いか、せむとて、なくくわかるとて」とあり、女の歌も後に記されていて、本来別れさせられる女への贈歌であった可能性が残されているし、伊勢物語の本文でも男の親が聞いていたかとみられる（親との贈答にはなっていない）。百二十五段の「つひに行く……」の歌は、大和物語百六十五段では、この歌に先立って、業平と弁の御息所との交渉が語られているので、この歌が受け手として弁の御息所を意識して詠まれたようにも受け取れるし、伊勢物語百二十五段の場合にも、周囲に死を見取る人々がいた状況での詠歌なのかもしれない。古今集・拾遺集の辞世を見て、他者に宛てててのものが複数あるから「つひに行

く……」の歌も同様だとしても不審はないが、そのような場合でも、死に臨んだ辞世には返答が示されないのが常態だ。つまり、特定の他者に宛てての辞世であっても、贈答歌待遇にならず、一方からの詠歌のみが示される点で、独詠性を認められるものといえよう。このような場合のあいさつ性も、出奔の場合に準じて解される。

他人の死を悼む哀傷に連なる歌は、四十五段にある。<sup>10)</sup>

蛩高く飛びあがる。この男、見ふせりて、

行く蛩雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げ  
こせ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととな  
くものぞかなしき  
(四十五段)

これらの二首は、これら載せる他の和歌集、即ち後撰集、古今六帖、在中将集、業平集、続古今集では、夏(蛩)あるいは秋の歌として採られている。歌の個々のことばも、蛩・雁・ながむ・かなしきなどがあるものの、哀傷の色合いは確定的でない。だから、採録歌集の分類のように、この段でも、穢れに触れて自宅に籠る「つれづれ」の折りに、単に季節の景物に私情を託して詠んだ歌と解することもできる。しかし、伊勢物語では歌の前に「まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり」とあり、哀傷の文脈の中にある。三代集を見ると、哀傷の部に属し

定の人物の死に言及する歌には、独詠のみならず、贈答および唱和も存在するが、贈答歌は、現世に残った者同士の間で慰めが示されて、弔問する者とされる者との間のあいさつであり、唱和も故人と関わる人を慰めつつ詠者たちが故人を追慕する情を共有することを表明するあいさつである。

だが、現世に残った他人との関係を顧慮せず、故人の死を悼む自己の心情を一義的に陳べた歌は自身に向かって詠じられ(ア)、あるいは故人に向かって詠じられた歌も通常死者とは交信が途絶えているゆえに同じく自己に回帰してきて(イ)、ともに独詠性が認められる。四十五段の歌の場合も、哀傷歌と見る場合には、「見ふせりて」とある詠歌の態度から、男の周囲に礼をつくすべき亡くなった女の親などもおらず(男の自邸とみられた)、彼らを詠歌の受け手としたともみられない。つまり、歌自体は自己(ア)、あるいは亡くなった女に向けられている(イ)。「行く蛩……」の歌が蛩に呼びかけられた体裁をとっていても、それは和歌の趣向にとどまり、擬人化された蛩にむけての贈答歌ではない。だが、「見ふせりて」という詠歌の態度は、同時に自己や死者への改まった態度の表明ともとれず、これら二首を載せる他の和歌集が、哀傷歌でなく夏あるいは秋の歌として採っていた事情と繋がっている。歌にあいさつ性を認めるにしても、弱いのである。亡くなった女が妻でも

恋人でもなかったことと相関するのであろう。

#### 四

このように、あいさつに関わる伊勢物語の独詠歌には、(ウ)の詠歌する場における受け手の存在を意識しつつ、意識せぬ建前(振り)で詠歌する場合を除く、(ア)(イ)(エ)(オ)の場合を認める、あるいは想定することができ。それらにおけるあいさつ性は、他者への通達が不可能な(ア)(イ)においては、詠者の内面の言語場に想定される「内面の聴手」、自己と抽象的な世間に対してのものと考えられ、従来の自己と精神的に区切りをつけることが重要になってくる。これに対し、詠み捨てながら他者への通達が可能な(エ)(オ)においては、詠み捨てであることによって(ア)(イ)同様に自己の内面における意識の区切りの意図も認められると同時に、他者への連帯の意志も認められる。この他者への連帯の意志は、通達不能ではあるものの特定の他者を心中の受け手として意識する(イ)にも認められる。そして以上の伊勢物語における独詠歌のあいさつをみると、他者との連帯志向の要素を認めなくてよいものは五十九段の隠遁に際しての「住みわびぬ……」の歌のみで、二十一段の出奔歌・二十四段の辞世は書きとめられることによって明確に他者連帯の志向が認められ、

四十段・百二十五段の辞世もそれを認める余地があり、四十五段の独詠歌も弱いながら哀傷歌とみるときは恋死にした娘への連帯の意志が認められることになる。つまり、伊勢物語では、あいさつの歌においても、通達の意図のない独詠歌が蜻蛉日記や源氏物語以降の物語に増加するといわれることと対応しつつ、逆に他者との連帯の志向を強く持っているといえるのである。伊勢物語にはいまだ人間連帯への信頼が感じられる。

このことの背後には、独詠歌の言語場が、そこに実在する主体が詠歌者一人であり、言語場としてもろい構造を持っていること、そのため受け手として他者を指向するエネルギーを常にはらんでいるコミュニケーションの場であることが関わっているかもしれないが、通達を意識しない独詠歌も伊勢物語には少数ながら認められるのであるから、やはり以後の作品と比較して人間連帯への強い信頼感の存在をみておいてよいのだろう。それは、あいさつの独詠歌をもつ段の他の箇所からも知られるところの、主観的ではあるが他者に対しておのれの誠意を示し他者の心を信頼しようとする作中人物の態度と一体のものであろう。例えば、二十一段で女に出奔されてとり残された男は、女の出奔の歌を見て、「けしう、心置くべきこともおぼえぬを、なによりてかからむと、いといとう泣きて」「思ふかひなき

世なりけり年月をあだに契りてわれや住まひし」と詠歌したし、四十段の男は、親の迫害の中で女をいやましに愛し、力づくで仲を引き裂かれるに際しては「血の涙を流し」、果ては、「……ありしにまさる今日はかなしも」と詠んで一度息絶えた。四十五段の男も、個人的には関わりのない娘が自分を恋い慕って危篤に陥ったと聞き、穢れに触れるのも厭わず娘のもとに「まどひ来た」のだった。

また、このような傾向のあいさつ性とともに、これらの独詠歌は詠歌する折における詠歌者の個人的な心情も併せ表現している。例えば、二十一段の出奔する女は、男と「いとかしこく思ひかはして、こと心な」く暮らしていたにもかかわらず、「いささかなることにつけて、世の中を憂しと思」って家出したがために、男の無理解を予想してその危惧と言ひ訳を歌に詠みこんでいたし、五十九段の隠遁する男は、他者への通達を意図しない歌の初句に、自分に言い聞かすように「住みわびぬ」と言い切った。また、辞世を「岩におよびの血して書きつけ」た二十四段の女は、そこに「あひ思はで離れぬる人をとどめかね」と自分の思いに応えない夫への恨みと無念さを詠い、一方向的に恋い慕ってきた娘の死に穢れた四十五段の男は、娘との個別の思い出もないがために「そのこととなくものぞかなしき」などと、夏と秋の行き交う風物の中で「つれづれとこも」る感

慨を詠じていた。

以上、伊勢物語の独詠歌にみられるあいさつ性として、他者との通達を意図しない厳密な意味での独詠歌に典型的な人生の折目に際しての認識を自己・世間一般に表出する要素と、多少とも他者との通達を意識しながら詠み捨てられる独詠歌に顕著な人間連帯への信頼と誠実さ、それらに併せての和歌的主情性とが認められる。これらの要素が、独詠歌以外の和歌のあいさつではどうなるのか、また散文の会話によるあいさつの自己表出とはどう違うのか、など、検討すべき問題は多いが、その詳細は別の機会にあらためて考えてみたい。

#### 注

- (1) たとえば国文学の周辺では、あいさつに関する次のような雑誌特集が続いて組まれている。『言語生活』196、昭和四十三年一月、『言語』昭和五十六年四月、『あいさつと言葉』(ことば)シリーズ14、文化庁、昭和五十六年四月、『言語生活』363、昭和五十七年三月、『日本語学』昭和六十年八月、『国文学』平成十一年五月、など。
- (2) 橋本四郎「古代の言語生活」『講座国語史』6 文体史・言語生活史、昭和四十七年二月。
- (3) 阪倉篤義「座談会『あいさつと言葉』をめぐって」注(1)『あいさつと言葉』。
- (4) 拙稿「挨拶のことばと源氏物語——其の一、竹取物語と宇

津保物語と枕草子から—— 佛敎大学『文学部論集』84、平成十二年三月。

(5) 拙稿「伊勢物語とあいさつのことば——作中人物の会話を中心に——」『京都語文』第七号（平成十三年五月）、参照。

(6) 源氏物語・伊勢物語の引用は角川文庫本による。

(7) 池田弥三郎「挨拶の文芸」『俳句』昭和四十八年二月）、井上新子『狭衣物語』における「挨拶」としての引用表現（『国文学攷』一四四、平成六年十二月）など。

これに加えてあいさつに関して二つの点を補足しておきたい。あいさつと近接する概念との相違である。一つは、あいさつと、礼（儀）やマナーとの違いについて。例えば、現代において、他人との出会いや別れにおいて、おじぎをしたり、「こんにちは」などのことばを交わすことは、幼児期から身につけさせられる躰であり、また、人への敬意を表する行ないであって、あいさつと重なる領域をもつ。しかし、礼は、儒教的な徳目の一つとして、社会秩序を乱さず維持するための超個人的視点による規定であるのに対して、あいさつは、動物のあいさつの行動が個体同士の服従・宥和を目的とする際に見いだされるように、個人と個人の関係構築に基礎を置く。人間や類人猿など、社会生活を営む動物にとっては、個体間の関係は集団内の関係の一要素を構成しているわけだから、そこから、あいさつも、目上の者に対するそれが教育的に強要されるなど、社会体制の維持に用いられることはあるが、これは優位者によるあいさつの政治的利用と理解すべきで、あいさつという行動は、そのような社会性をもちながらも、本来的に個人と他人との関係レベルのもの、文化性をもつ個人のレベルの行動と理解しておくべきだろう（ただし、A国

民〔またはA国大統領〕からB国民へのあいさつ、というような個人の概念から発展したと見るべき集団におけるあいさつのケースもありうる。

また、マナーは、あいさつの仕方、食事の作法などにも言うように、ある社会・集団・階層のもつ規範・美意識に基づく行動様式であり、あいさつが個人の人間関係維持という精神的性格をもつものに対して、外形的側面が強調される。あいさつ行動においても、マナーとしてはその様式性・洗練さが注目されることになる。

こうして、あいさつは、個人レベルの人間関係維持を目的とする行動として、礼（儀）やマナーと区別される特質をもつが、個人間の関係構築の面からみると、また一方で、コミュニケーションとも繋がってくるわけである。この関係が二つ目の補足。

コミュニケーションは、送り手がある手段を通じて受け手に何らかの情報を与え、そこに効果の生じることであるから、あいさつも、言葉や身振りによって、送り手の受け手への存在認知の態度や親愛や敬意の情を伝え、そこに両者の良好な人間関係の確認・維持を願うわけであるので、当然、コミュニケーションに含まれ、その一部をなす。しかし、その全体ではない。また、一般の会話・情報交換も、相互の親密度を深めるのに役に立つが、あいさつが人間関係の構築・維持・確認を目的として相手の存在を意識している・区別にかけているなどの通達を第一義としているのと、やはり区別されるべきだろう。もともとその境界は曖昧ではあるのだが、あいさつを、人の出会いや別れの場に集中して用いられ定型化・短縮化の進んでいる表現などと規定したりすることが多いのは、

この境界の曖昧さ・認定の困難さと関連している。

だが、良好な人間関係の構築・維持・確認を目的として交わされることばや身振りという視点から見るなら、あいさつは、人の出会いや別れの場以外でも見いだされることになるし、また定型化・短縮化の進んだ表現でなく、兩人の関係と立場と意思を反映して個性的な表現ともなってくる道理である。式典における関係者の「挨拶」や、人間関係修復を目的とする謝り・詫び、あるいは逆の祝い・見舞いの「挨拶」は、それ自体が用件となつて、その接触中の要素的順序やその表現において、ある程度の約束事をもちながらも、かなりの自由、つまり個性もあわせもつ。こうした場合、その時のコミュニケーション全体におけるあいさつ部分と非あいさつ部分の識別は一層曖昧に、また困難になつてくる。

あいさつとコミュニケーションの関係では、この包含関係と識別の困難さに留意しなければならぬ。会話性をもつ和歌におけるあいさつ性を見るときも、同様である。

(8) 久保木哲夫『「唱和歌」考』『日本文芸思潮論』。氏は、第一次享受者の他に第二次享受者（歌集・日記・歌語り・歌物語などを通してしかその歌に接することのできない享受者）を考へておられるが、今はこれを除外する。

(9) 今井卓爾「源氏物語の贈答歌」『国語と国文学』昭和四十四年五月。

(10) 六段の「白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを」の歌は、新古今集で哀傷の部に採られている（第五句「けなましものを」）が、歌の直前の「やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足足りをして泣けども、かひなし」という語りの状況からすれば、女との死別を

認識し受け入れた上でのあいさつというよりは、自己の悔やんでも悔やみきれない慟哭性が顕著であるので、本稿では独詠のあいさつの例からはずした。だが、新古今集のように「題しらず」（承前）としてこの歌だけを見た場合でも、新撰和歌（第三句「とひしより」、新編国歌大観による）がこの歌を巻四の恋雑に入れ（賀哀は巻三）、そして折口信夫全集ノート編十三『伊勢物語』の説と通じつつ、日本古典文学全集『伊勢物語』が、「本来涙の玉にかけて、『それは白玉でしようか、と人が尋ねたとき、悲しい心のわたくしは、浮かぶ涙を露と答えて、露のようにはかなく死んでしまつたらよかったのに』という意味の歌らし」と言っているように、哀傷歌とはとりこしい。新古今集の理解には「題しらず」としながら作者を「業平朝臣」とするように伊勢物語が背景にあるのだが、その新古今集がこの歌を哀傷に入れてはいるのも、例示は略すが前後に配された小町歌や醍醐天皇歌から知られるように、人の死を機縁として生成された自己の心情を表白したものととしての扱いであり、特定の個人の死を直接悼むものとしての理解ではないとみられる。

(11) 片桐洋一『鑑賞日本古典文学 第5巻 伊勢物語・大和物語』。

(12) 後藤祥子「独詠歌論」『国文自白』7、昭和四十三年三月、伊井春樹「物語における和歌——独詠歌の展開——」『論集和歌とは何か 和歌文学の世界第9集』、石埜敬子「独言と手習——狭衣物語から——」『国文学』平成四年四月、吉本隆志「蜻蛉日記における叙述の方法としての独詠歌の誕生」『国文学論集』26、平成五年一月、など。